

鳥学の国際化

山 岸 哲

「鳥学の国際化」については、先般の鳥学会大会総会でも、
早田長久先生がかなり意識的に会頭演説の中で強調されていた。

アメリカのD. Mock博士を招いての第1回国際鳥学セミナー
の実現や早田会頭が次回国際鳥学会の名誉大会長をつとめら
れること。また日本人研究者による国際鳥学雑誌や他の専門
分野の雑誌への投稿数の増加、国際会議への日本人参加者の
増加、海外鳥学留学者の増加、さらに外国人鳥学者の相次ぐ
来日、日本人による国際会議でシンポジウムの企画・主催
や挫折はしたもののわが国での国際鳥学会開催の動き、海外
学術調査及び海外との共同調査が少しずつ始まっていること
など、鳥学の分野でも、このところ国際化が急速に進んでい
るように見える。このような状況の中で、鳥学の真の国際化
とは何なのかといった基本的問題を一度考えてみる必要があ
らう。



学問は国際化されればされるほど多数の考え方の違う人々
と論議が可能になる、という利点があることはあまりにあた
りませすぎる。そのためには、まず互いの意志を伝え合わなければどうにもなるまい。意志伝
達が自由にならないのに国際化など叫んでしま始まらない。ただし、このことは通訳をたてたり、
翻訳者を利用すれば乗り越えることのできない障壁ではないから、国際化の本質は別においそう。

鳥学の国際化の流れは大きく分けて2つの側面から押し進められてきたように思われる。ひ
とつはハード面であり、残りはソフト面である。前者はわが国が異常とも見える経済発展をと
り、一昔前と比べて信じられないほどお金持ちになったことによって可能になった。国際会議
や外国調査に出かけたり、外国人研究者を招くには、とりあえず先立つものがなければならな
いだろう。また、国際会議に出かけたり、外国の調査をするだけのことならお金があればまず
はできる。

私たちがもっと忘れてならないのはソフト面での国際化であろう。これはもろに研究の視点
とその独創性に関わる部分である。研究が国際的であるということは、論文が英語で書かれて
いたり、英語で発表されるということではあるまい。その内容こそが国際的・独創的であらね
ばならないだろう。

本ニュースの前号で、上田恵介君がフィンランド鳥学会で調べたという、フィンランド人研
究者の書いた論文が他の国で引用される数について、非常に興味ある紹介をしている。フィン
ランドも鳥学の国際化に向けてたぶん発展途上にあるから、こうした試みがなされるのであ
ろうが、重要なのはやはり数ではないような気がする。

西欧の人たちは日本人の鳥学者に対して、別刷りはよく請求してくるものの、一般には我々
の仕事は無視されることが多い。たまさかひきあいにはだされる場合でも、その引用のされ方を
見ていると、「このでの仕事には、日本の何の何がしの、何年の何々の種で行われた仕事もあ

る」という文脈で引かれることが多い。これは、日本人が理論に弱く、新しい考え方そのものを提示するような論文をほとんど発表していないことにもよるが、今後は「この結果は日本の某氏のこの考え方で説明できる」とか、「日本の某氏の考え方はこの点で違う」といった実のある引用をさせることが望ましい。

日本には明治以来、西欧文化への大きな憧れと外国崇拜主義の風潮が存在し、それは現在も脈々と続いているように思える。私は国粋主義者では決していないが、最近の論文を見ると、その多くは英語を使い、英語圏の思考法を使って書かれたものが多いように見うけられる。日本独自の固有な思考法を駆使して外国人にも読んでもらえる論文がでてきたときに、鳥学の真の国際化が果たせるのではあるまいか……などと1989年の年頭に当たり初夢のようなことを考えてみた。

特集・第1回 国際鳥学セミナー

世界の一流の学者を招き、日本の鳥学のレベルアップを目的として開催されたセミナー。

第1回は、米国オクラホマ大学のモック教授を招へいし、大阪・京都・東京・札幌の順で、ワークショップや公開講演会が開かれました。多数の出席がありましたが、参加できなかった方のために、関係者の方々からレポートを寄せていただき、その全容を紹介します。

——大阪ワークショップの報告——

第1回国際鳥学セミナーの一環として、社会生態学を中心としたワークショップをお引受けして、2日間にわたって大阪市立大学理学部で開催した。講演された論文は以下の通り(タイトルの日本語訳の責任は筆者にある)。

10月24日; 『鳥類の生態及び行動』に関するセクション

- 1)カモメの採餌行動と育雛行動の個性性、綿貫豊(国立極地研)
- 2)セグロセキレイの育雛行動と雛の独立過程、大迫義人(阪市大・理)
- 3)カッコウと宿主の共進化、中村浩志(信州大・教育)
- 4)シジュウカラの番い維持とねぐら場所、斉藤隆史(筑波大・生物)
- 5)鳥類の兄弟殺しと利己的行動、ダグラス・モック(オクラホマ大)

10月26日; 『一夫一妻鳥における雌雄の抗争』に関するセクション

- 1)テーマ設定の理由、山岸哲(阪市大・理)
- 2)若齢ヒメアマツバメにおける高齢相手を求めているの離婚、堀田昌伸(阪市大・理)
- 3)複婚のオオヨシキリにおける親による子の世話の変異、浦野栄一郎(阪市大・理)
- 4)オオヨシキリにおける番い相手の遺棄、江崎保男(京大・理)
- 5)乱婚のイワヒバリにおける父性の問題、中村雅彦(阪市大・理)
- 6)セッカにおける子どもの遺棄、上田恵介(三重大・教育)
- 7)総合討論

会議の冒頭ではこのワークショップの意義も含めたご挨拶を森岡弘之氏(国立科博)にいただいた。司会は1日目が江口和洋氏(九大・理)、2日目は森岡弘之氏(前出)にお願いした。総合討論では行動生態学ないし社会生物学の将来に話が及んだが、「まだまだ、おいしい肉はたくさん残っている」とのモック氏の発言が印象に残った。すべて英語を使っているのなれない会議で大変疲れた2日間であったが、およそ30名の参加を得て有意義に終了することができた。(山岸 哲)

ワークショップに参加して

浦野栄一郎

今回のワークショップには、ホスト校の院生ということで、発表者としてだけでなく、企画の段階から参加する機会に恵まれ、貴重な体験をすることができた。

ワークショップの企画について、最初に意見を求められたのは、昨年1月だった。この時点では、鳥類の「親による保育」を中心に据えようということだけが決まったが、まだ9ヶ月も先のことでもあり、どこか他人事という気持ちであった。

7月になって、ワークショップはにわかにな身近なものとなった。山岸哲先生、上田恵介さん、江崎保男さんに私も加わってプログラム検討会議が開かれた。議論は行きつ戻りつした末に、晩成性鳥類の中で、両親がそろって、精一杯子の世話をしているらしいヒメアマツバメから、完全に雌に任せてしまうセッ

カまでを並べ、保育をめぐる両性の利害の対立について考えようということに落ち着いた。この流れの中で、私自身も発表することが決まった。

発表内容の大筋は直ちにまとまったものの、細部を詰めるためには、眠っているデータを起こす必要があった。これに予想以上に時間をとられてしまい、発表原稿が完成したのはワークショップの前日だった。2年前に初めて英語で発表した際に、発表内容は理解してもらえたが、質疑応答でメロメロになってしまった。この苦い経験から、議論になりそうな問題については、英語での答えを用意しておこうと思っていたのだが、時間切れで間に合わなかった。しかし、他の面では前回の経験を生かすことができ、自分ではまあまあの発表ができたものと思っている。

発表は英語で行われたが、かなりよく理解することができた。しかし、これは私の英語の力によるものではない。日本人の話す英語は同じ日本人には聴き取りやすい上、研究内容について日頃からよく知っている人ばかりが発表したことにもよる。Mockさんはやや早口で、慣れないうちは聴き取りにくかったが、スライドが非常に分りやすかった上、丁寧なレジュメまで用意して下さったので助かった。発表の中でも紹介された藤岡正博さんの仕事や彼との議論を通じて、兄弟間競争の理論的背景だけでなく少し前までのMockさんの仕事を知っていたのも、理解の助けとなった。個々の発表は、いずれもしっかりとしたフィールドワークに基づくものだった。しかし、よく知っている研究が多かった分、正直に言って私にとっては新鮮味に乏しかった。

英語に限定することで質疑応答が不活発になることを懸念した座長の提案で、質疑応答は日本語使用も可となった（これは、公開講演会の通訳のために参加していた大庭照代さんのご協力で、初めて可能となった）。おかげで個々の発表について



講演会のスライド
のひとこま

は、活発な議論ができたように思う。しかし、2日目の発表を締めくくる総合討論では、この日の発表に即した議論はまったくできず、残念だった。プログラムの変更もあって、5つの発表に共通する話題を探し出すのが難しかったのも原因だろうか。総合討論の場では代わりに、行動学のこれからの方向性や社会生物学（ないし行動生態学）の理論的枠組みの有効性に関するMockさんの見解に質問が集中した。質問者は、現在の理論枠にある種の限界を感じて「その先」についての答えを求めていたのに対して、Mockさんの答えは、現在の枠組みの中で取り組めるおもしろい問題はまだまだある、というもので、議論は十分にかみ合っていなかったようである。

Mockさんの話の中で最も印象的だったのは、「成功する科学者は問題に対して常に複数の仮説を持っている」という言葉だった。大阪・京都での3日間を通じて、彼はそのことを繰り返し述べ、実践してみせてくれた。

—— 公開講演会 ——

● 京都（10月25日・京都大学）

江崎保男

兄弟間のいがみあいはい自然界によく見られる現象であり、これに関わる個体の死をもたらすことさえある。遺伝的に近縁で進化上お互いに尊重しあわねばならないはずの兄弟姉妹がなぜこうもいがみあい、傷つけあうのか？ また親はなぜこれをやめさせないのか。

“ Aggressive sibling rivalry in birds and why parents don't stop the fights ” と題されたMock博士の京都での公開講演は1988年10月25日の午後、70名余りの参加者で埋まった京都大学理学部の大講義室で開催された。当日は天候も回復し京阪神はもとより名古屋方面からも鳥学会員、大学関係者を含む実にさまざまな人々が多数参加され、会場の世話人としてまずほっとした次第だった。

Mock博士が研究するサギ類では親が1巢分の卵を産み終える前に抱卵にはいるため、卵のふ化時期にずれが生じる。このふ化のずれが兄弟間に体の大きさの著しい差をうみ出し、兄弟げんかの末、時には最も遅くふ化した最小のヒナが犠牲となるので、親自身がこの悲劇をうみ出す張本人であると考えられる。

兄弟げんかは親が巢に運ぶ餌をめぐることで起り、大きなヒナは弱者を攻撃することによって効果的に餌を独占する。そこで餌が十分ありさえすれば弟や妹をいじめる必要はないの

ではと予想できる。

博士はまず人工的に餌を通常の2倍量にしてみたが結果は予想外だった。けんかの頻度は減るところか、むしろやや増加した。ただし末子の死亡率は減少した。いじめられても餌が十分あるので生き残れるわけだ。

次に通常3羽のヒナを一時的に2羽に減らしてみた。餌をめぐるライバルが減ればけんかする必要もないだろうということである。結果は予備通りでけんかの頻度は大きく減少した。普段いじめられている末子といじめる側の1羽のいずれを除去しても結果が同じだったので真にヒナ数がけんかの鍵を握っていることになる。

なぜこのようなやり方が進化したのか。サギ類の餌(魚など)は供給が非常に不安定な代物である。そのことがその原因だと博士は主張する。ヒナにとっては今日餌が十分あるからといって明日も同じだという保障はない。もし誤ってこれを信じ、弟や妹への攻撃の手をゆるめると自己の優位(体の大きさ)を失いかねない。そんな折に食物不足が訪れたら、自らが命を失いかねない。いくらいじめても食物が豊富であれば弟や妹はちゃんと生き残る。

一方、ヒナが2羽になってもけんかを続け、1羽だけになってしまう個体にはきついペナルティー(捕食、親の子育て放棄)が待っている。そこで日々の餌量にではなく、ヒナ数に敏感に反応してけんかの頻度を調整するのが最も適当なやり方になるというわけである。親から見れば、子の中に体の大きさの差さえつけておけば、後は子が自らその年の餌量に応じ生き残るヒナ数を最大にしてくれるわけだから、だまって兄弟げんかを見ていればよいことになる。

講演はMock博士がスライドを見せながら、ゆっくりと区切りをつけて説明し、区切り毎に大庭照代さんが通訳するという形をとったので非常にわかりやすかった。講演終了後も多様な質問が参加者から次々と出され、博士がこれに丁寧に応対する。さらに討論が続くという具合に熱気に包まれた雰囲気の中、予定の時間があつという間に過ぎてしまった。

以上のような京都講演会の成功は、世話人の方々の前もっての準備と宣伝、講演者の実力と話術、通訳の方の御苦労等がうまくかみあって可能になったものといえるが、講演者の人選が全体の鍵を握っていたのは間違いない。Mock博士には実力、話術のみならず、サービス精神が旺盛で、聴衆に理解させようと

する熱意がひしひしと感じられた。人選に間違いがなければ準備にも熱が入るものである。最後に通訳をつとめられた大庭さんには本当に御苦労様と申し上げたい。

● 東京 (10月29日・中野サンプラザ)

東京では森岡弘之・竹下信雄さんが中心となって、中野サンプラザの一室で開かれた。通訳は大庭照代さん。参加者は42名で、学生から熟年者までさまざまな年齢層の出席があった。講演会后、有志でモック教授を夜の新宿を案内した。



(撮影：竹下信雄)

● 札幌 (10月31日・北海道大学)

札幌では正富宏之・藤巻裕蔵さんが中心となって北海道大学の講義室で開かれた。通訳は竹中万紀子さん。参加者は25名とまずまずで、学会員の他、ポスターを見て北大の大学生や院生が多数出席した。講演会後の懇親会では、話が多岐にわたりはずんだ。

なお、阿部永・福田弘巳さんにお世話いただいた。

~Douglas W. Mock教授の略歴~

1947年7月4日、ニューヨーク市で生まれた。現在41歳。コーネル大学を卒業、ミネソタ大学大学院からMS(1972年)とPhD(1976年)を得た。大学院での指導教官は、カモ類の社会行動の研究をしていたFrank McKinney博士。学位論文は「オオアオサギとダイサギの社会行動」。1983年以来オクラホマ大学生物学教授。論文は多数。AOU, Wilson鳥学会, Cooper鳥学会の3学会から「Best Student Paper」の賞を受けている。

モック教授との一問一答

東京での公開講演のあと、短い時間をいただいてインタビューをする予定でしたが、長時間の講演と質疑応答、それに多忙なスケジュールで疲労の様子でした。それで、それをとりやめ、手紙で質問に答えてもらいました。なお、質問の項目は何人かの意見を参考にして、読者を念頭において、編集部できめました。

(編集部) 日本訪問は初めてですか? 日本の第一印象はいかがでしたか?

(モック) ええ、10月の訪問が私の日本への初めての旅でした。私の「第一印象」は、大阪や東京というような都市を中心にせざるを得ません。印象深かったことは、人口稠密であること、ものすごく明るくイルミネーションに彩られた夜景、また驚くほど清潔(通りに落葉がなく、壁に落書きがないなど)なことです。

(編集部) 大阪に到着してすぐ広島に短期間の旅行をされましたが、もしかまわなければその理由をうかがえますか?

(モック) 2つ理由があります。まず、旅の疲れから回復し、頭がしっかり動くようにすること、第2は、広島は原爆の地として歴史的意義があるからです。まだ大学生だった1967年に、私は社会学のコースをとり、日本の工業発達について学び、その時に2つの原爆投下地(広島と長崎)、とくに長期にわたる健康への影響を調べました。もちろん何年も前のことですが、これは私にとって非常に衝撃でした(当時、私は兵役の年齢でし、アメリカはベトナム戦争に深入りしていたことを思い起して下さい)。とにかく、私は原爆ドームや平和記念公園、平和記念資料館(原爆資料館)を見たかったのです。(私は、ひろしま美術館にも行きました。そこで、フランス印象派の絵画と伝統的日本画との間に、数多くの類似があることに初めて気づき、驚きました。)

(編集部) 鳥学者のなかには小さいころから鳥好きだった人が多いとききますが、いつごろ(何歳の時)鳥に興味を持ちましたか?

(モック) いや、私は子供の時からのバードウォッチャーではありません。しかし、動物についていろいろの本を読み、野外生物学者かなんかになりたいと思っていました(当時、爬虫両生類学を第一志望にしていました)。



私が鳥に興味を持ったのは20歳のころで、この時に初めて動物行動学のコースをとり、野外生物学がまだ存在していて(当時、「実験白衣」生物学が、あたかも野外生物学を引き継いでしまったかのように思われ始めました)、鳥が一番多く研究対象になっていました。今、私は、観察によって行動の研究をする場合、鳥はたくさんの利点を持っていて、それだからこそ研究するのに魅力的な動物だと確信しています。

(編集部) サギ類の他に、どんな鳥に興味をお持ちですか?

(モック) 前の質問への答えからわかるでしょうが、私は必ずしも種(あるいは科)に注目しているわけではなく、科学上の問題を志向しています。たまたま私の研究の大半がサギ類に向けられただけで、これはまったく偶然です。私はサギ類から出発し、今では研究対象としてサギ類に好ましい「感触」を抱いています。そのためサギ類でのほうがはか

の鳥でよりも効率よく仕事をすることができ
ます。さらに、サギ類はコロニー性であり、
このことははっきりした定量的データを何組
をも集めるのにもものすごく有利です。私はこ
れまで、ツバメ類やカツオドリ、カモメ類
(現在の研究課題)について少し研究しまし
た。私はしかし、進化生物学上の好奇心をそ
そる鳥ならどんな種にも同等の興味をもっ
ています。

(編集部) 日本の鳥類研究者の何人かは、
あなたが細身で背が高いことから、オオア
サギに似ていると感じました。身長はどれく
らいですか？

(モック) 日本滞在中、25回も身長のこと
をきかれました。ここで公式に答えましょう。
6フィート6インチ強、約200cmです。

(編集部) オクラホマ大学では何を教えて
いますか？ 学部学生への講義科目や野外・
実験室実習、また大学院生への講義や研究指
導などをお教え下さい。

(モック) 私は、通常講義3科目と大学院
生向けの特別セミナーの組合せを担当して
います。通常講義は、動物行動学(学部3、
4年生対象)、社会生物学(大学院生)、鳥
学(ふつう学部4年と大学院1年でとる)で
す。はじめの2科目は、きっちりした「教室」
講義で、学生たちは約30回の講義(1回75分)
のほかに、少し多めの読書とレポート作成が
要求されます。私の妻、P.L. シュヴェハマイ
ヤーは、私の講義を補う動物行動学実習を学
部学生に教えています。鳥学はごく少人数(ふ
つう10人くらい)がとり、講義や実験実習、
野外旅行を組合せています。4月の最終週の
週末には、3日間をかけてオクラホマ州最西
端に出かけ、かなり乾燥した地域の鳥類を観
察し、ソウゲンライチョウのダンス場(「レッ
ク」)をも訪ねます。

(編集部) 愚問かもしれませんがあえてお
たずねします。たくさんの科学論文を発表さ
れたなかで、日本の鳥類研究者に読むことを
すすめるとすれば、一番よいのはどの論文で
すか？ プロとアマチュアにそれぞれひとつ

ずつ、論文名と発表雑誌名をお教え願えませ
んか？

(モック) 私が書いた論文はそれぞれ私に
とってまったく別々のもので、ここにひとつ
あげると言われても困難です。私はいつも、
何を書いたとしても最近のものが「一番よい」
と思っています。しかし、正直に言えば、1985
年に発表した論文(“Siblicidal brood
reduction: the prey-size hypothesis”
The American Naturalists 125: 327-343,
1985)が、あとから考えてみて、一番うれし
かったものです。だからプロのかたにはこれ
をあげたいと思います。しかしこの姉妹篇に
あたる短い論文(“Siblicidal aggression
and resource monopolization in birds”,
Science 225: 731-733, 1985)で、仮説を
実験的に検証し、この2つが1組になってい
ます。ですから、この1組を読むことをすす
めます。アマチュアのかたに対しては、ごく
単純に論文を選ぶことができます。それは、
私が一般向けにはただひとつ書いただけだ
からです(“Knockouts in the nest,” Nat-
ural History Magazine 94: 54-61, 1985)。
このなかで私は、兄弟殺しについての私自身
の研究のいろいろな問題をまとめました。

(編集部) 日本の鳥学者に何かメッセージ
はありますか？

(モック) これまで私は、一般的な「メッ
セージ」をたのまれたことはありません。そ
れでこれにはちょっと困りました。しかし、
考えていることを述べたいと思います。それ
は、「鳥学」は真の科学としてはもはや存在
せず、むしろ好奇心をかりたてる数多くの生
物学研究にとっての興味を共有する領域、あ
るいはフォーラム(討論の広場)として存在
すると思います。科学的、実利的または美的
理由で鳥を研究する人びとが集まって興味の
あることを議論したり、雑誌を発行したり、
意見を公表する組織をもつことは何らまちが
っていません。しかし、私たちの共有の場は
かなり便宜的であることを認めないわけには
ゆきません。私はたまたまサギ科について研

究(大部分は)していますが、サギ学という
ような科学を望んではいません。同じように、
私たち、羽毛をもつ脊椎動物の研究者は、お
そらくすぐに爬虫類や哺乳類の研究者を含め
ることができます。この場合に別のラベルが
必要になるのです。よくありがちなのですが、
現在のラベルをあまり本気に考えないでほし
いと私は思います。問題は、私たちは学びつ
づけ、その知識を他の人に利用できるように

することです。

このほかに私からのメッセージは、1新年
おめでとうございます。2日本鳥学会とすべ
てのみなさまに、私を日本に招いて下さった
ことに感謝申し上げます。私は素晴らしい時を
過し、たくさんの優れた科学者(鳥学者やそ
の他の)に会いました。

ダグラス・モック

1988年12月30日

(訳・長谷川 博)

通訳をしながら

大庭 照代

Dr. Mock の 公開講演会に通訳をつけるということになって、札幌では在任の竹中万紀子
さんをお願いし、京都と東京は私が担当することになりました。送っていただいた講演者要旨
のテープの声を聞きながら、どんな方なのかしらと楽しみにしていました。ただし、テープの
中に聞きとれない言葉があって、もし当日の会場で肝腎な箇所が聞きとれなかったらどうし
ようと、けっこう緊張しました。

Dr. Mock とは、講演会に先がけて大阪市大で開かれた国際鳥学セミナーで、初対面しまし
た。背の高いアオサギを思わせる温厚な風ほうで、私の勝手なアメリカの行動生態学者のイメ
ージとはだいぶ異なっていました。少し遅れて到着したために、まともな自己紹介なしに私は隣
席で通訳開始。講演でも強調されていたように、対照を上手に使った実験的手法による仮説の
検証と論理の展開は、行動生態学の基本といえるものでした。Dr. Mock は、日本の若い研究
者が次々と成果を発表して、彼の科学的創造性を刺激するたびに、目くばせしたりうなずいたり。
質疑応答では実験の可能性を含めて示唆に富んだ意見を出して、議論が活発化しました。
私も、一学徒として参加したかったのですが、同時通訳もどきにふるまう破目になって、自分
の考えよりも人の考えを追いかけてまわっていました。でも、興奮したこと。

集中力と度胸を駆使して疲れ果てる通訳も、3日やったらやめられません。出会いの豊かさ
ゆえです。Dr. Mock とは鳥のことよりも人間社会の話をしたかもしれません。来日後広島に
直行したというくらい、平和と人間の良心について真面目に考えておられました。先の大統領
選で、民主党が政権を奪還できず、困惑なされたことでしょう。逗子市の池子の森が、40年
も昔の環境観を欠いた条約のため、永久に破壊される危険
については、深い驚きをもっ
て、状況の改善を強く望んで
いました。また、京都の御所
前では天皇の代替わりにと
もなう社会変化にまで及び
ました。実に幅の広い興味
対象をもち、まじめに取り
組む誠実な Dr. Mock の
姿勢に、心強く爽やかな
印象を受けました。また、
いつかお会いして、現在
取り組んでいるプロジェクト
の成果とともに、さまざま
な話を伺いたいと思います。



東京会場にて

Information

急募

オロロン鳥の研究に取り組む人は
いませんか？

近年、ウミガラスの繁殖地は北海道近辺から無くなりつつあり、集団繁殖地として名高かった天売島からもその姿が消えようとしています。その実態と原因等を明らかにするために、1989年3月から8月くらいまでの間、天売島に住み込んで研究に従事する人を求めています。生活費や住居等は北海道（環境庁委託）や羽幌町が用意する予定です。

希望の方は、下記まで急ぎお問い合わせ下さい。

(〒079-01) 美唄市光珠内

専修大学北海道短期大学 正 富 宏 之

☎ 0 1 2 6 6 (3) 4 3 2 1

● 鳥類目録改訂版の分布資料収集に協力を。
再度のおねがい

鳥学ニュース版29で分布資料の収集をお願いしたところですが、1月20日現在、下記の地域の資料がまだ集っていません（近日中にお送り下さるとの連絡をいただいた地域を除く）。分布調査協力員、会員諸氏のご協力をおねがいします。

宮城、静岡、愛知（南三河地方以外の資料なし）、三重、京都、島根、山口（見島以外の資料なし）、高知、長崎、沖縄（北部）

送り先（〒080）帯広市稲田町

帯広畜産大学 藤 巻 裕 蔵

鳥類研究グループ (3)

沖縄野鳥研究会 <1984年>

① (〒901-02) 沖縄県豊見城村字真玉橋323-1 比嘉方 ☎ 0988 (50) 4087

②③ ^{ひがくにあき} 日嘉邦昭 (代表と事務局を担当)

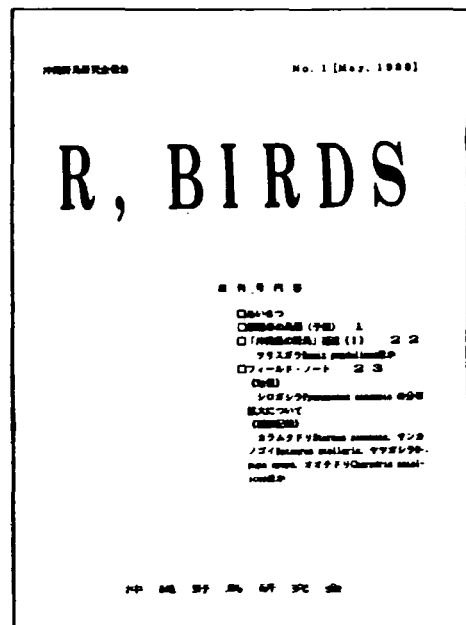
④ 沖縄県を中心とした南西諸島の鳥類相の研究や自然保護に関心のある者が集まり調査研究のレベル向上と親睦を目的に自然発生的に発足した。

⑤ 県内初の写真図鑑「沖縄県の野鳥」(1986年)を発刊、同年9月には「ノグチゲラ発見100年展」を主催して、山原(やんばる)の森林伐採に警鐘を鳴らした。1987年8月には、山階鳥研の標識チームの協力を得て、名護市多野岳で標識講習会を実施。同年12月から1988年3月の間、与那覇岳周辺の特種鳥類調査を実施したのに続いて現在、沖縄本島の鳥類調査を継続しており、これまでに本部(もとぶ)半島と名護市を除くほぼ全域の調査を終了した。今秋(1989年)までに報告書をまとめる予定である。

⑥ ^{アール} R, BIRDS (年1~2回発行, B5版)

⑦ 13名(1名) 建築士, 会社員, 地方公務

員, 歯科技工士, 団体職員, 教員など多彩。
⑧ 特になし ⑨ 特にないが例会では常に会員の誰かが飲物や茶菓子を差し入れている。
⑩ 毎週木曜日午後7時から例会を開き、情報交換を中心に調査計画を立てたり調査の進行状況をチェックしている。沖縄野鳥の会(吉里伸会長)とは緊密に連絡を取りあっている。



「帰らぬつばさ—ほろびゆくコウノトリの挽歌—」

著者：林 武雄

体裁：46版・290頁(写真100枚)・並製本

発売期：2月20日予定

内容：鳥獣保護行政に携わった著者の目を通して
コウノトリが絶滅した過程をリアルに、日
本の鳥類保護を考える読本である。
財日本鳥類保護連盟推薦図書。

「富士山麓の仲間たち—富士山と富士五湖の野生生物—」

著者：中川 雄三

体裁：A4判・108頁・上製本

価格：3,800円

内容：「動と静」をテーマに富士山麓に棲息する野鳥・小動物の生
態を微妙なカメラアングルで撮影した貴重な写真100点に解
説を付した動物写真集。
世界で初めて撮影に成功した「モモジロコウモリの水飲み」
を収録。
アニマ賞受賞写真家・中川氏のとらえた富士山麓の四季の彩
りが自然界と動物たちとの見事な調和・秩序を演出している。

申込先：〒162 東京都新宿区東五軒町1-2

(株)ぎょうせい 南関東支社

江 口

Tel. 03-269-1341

農林水産省農業研究センター鳥害研究室

日本の主食である米（イネ）の生産が過剰となり、古米の累積が問題となり始めたのが1960年代の終り頃である。そのため、米生産調整対策や水田利用再編対策といった生産抑制対策がとられ、そのかわりにダイズ、ソバ、ムギなど転作対象作物の生産が奨励されるようになった。しかしまもなく、それら作物の生産阻害要因がクローズアップされるようになった。

ダイズ生産の問題の1つがハト害である。そのため、1975年前後から、ダイズの栽培研究者が中心となり、ダイズのハト害の研究がほぼ全国の試験研究機関で行なわれるようになった。

そうした背景もあり、農林水産省は1980年10月に、鳥害研究室を発足させた。全国で唯一鳥害を専門に扱う研究室である。現在のところ定員は2名で、“慢性的人欠状態”が続いている。研究室の業務内容を定めている規定によれば、「作物の鳥獣害に関する試験研究を行なう」とされているが、獣を扱う余裕は勿論ない。

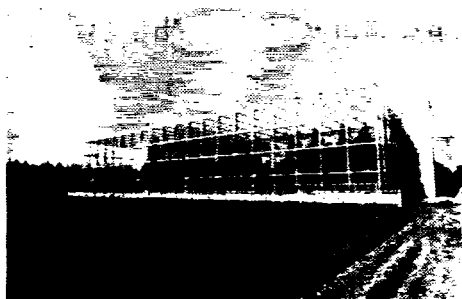
研究室の設立の経緯から、ダイズのハト害を中心に研究を行なっているが、その他野菜を加害するヒヨドリや昔からなじみの“害鳥”であるスズメ、それに水田に直接モミを

播いた場合に問題となるカルガモの害等を扱っている。対象となる鳥の種類は、作物の栽培面積、栽培方法の変化、また行政対策など農業を取巻く環境の変動とともに変わって行くと予想される。しかし、研究の柱としては、現在行なっていること、これからやりたいことを含めて、次の3つを考えている。その第1は、作物の被害調査や被害解析である。ここでは、被害の状態、量、被害の発生時期・場所などの調査が主体となる。また、ダイズの子葉食害のように、被害が作物の生育の初期に現れる場合には、それが収穫量とどのように関係するかなどを調べる。

第2は、対象となる鳥そのものの研究である。その鳥の生理から始めて、生活史、採食生態、個体数の変動様式などがあげられる。第3は、被害防除法の開発である。ここでは、様々な忌避剤のテストや、各種防鳥機器の開発、効果判定を行なったり、あるいは鳥の数をどのように調節するかといった、有効な鳥害の軽減対策を確立するのが目的である。

これらの研究は、フィールドまたは鳥害研究室付属の実験施設で行なう。フィールドは試験場の圃場、防風林が中心となるが、農家の圃場での調査も含まれる。実験施設には、大網室(60×40m、高さ12m)をはじめ、飼育網室(4×6m2室、4×3m4室)、温度制御可能な飼育室(3×4m5室)がある。大網室にはVTRカメラが4台設置され、実験棟からの操作で鳥の行動を記録できるようになっている。

定員の少なさ、その逆に研究の柱や研究施設の大きいことから、外部の研究者の施設利用には前向きに対処している。現在まで、他研究機関の研究者、大学の教官が流動研究員として鳥害研究室で研究を行ない、また大学の学生が(当研究室でアルバイトをしながらというケースもある)卒論、修論を書いている。鳥害に関する基礎、応用研究を当研究室で行なうことを希望する学生、研究者の相談には今後とも応じる予定である。(松岡 茂)



大網室

1989年度大会の実施要領について

今年度大会は東京以外の地区で開催の予定でしたが、ある事情でそれが困難となり、東京地区で再び行なうことになりました。このため、準備が多少おそわれています。また、大会の規模が大きくなるにつれ、準備委員側の負担も無視できぬ傾向にあります。このような状況を考え、今年度は新しい試みを行なってみたいと思います。会員の皆様のご協力をお願いします。

従来と違う点は、以下のとおりです。

- ① 研究発表の申し込みは講演要旨の受け付けによって行ないます。従来は題名だけを記載して研究発表の申し込みを行ない、準備側はそれによって時間表を作成し、それから講演要旨の送付を依頼していましたが、今回はいきなり講演要旨を送っていただきます。発表者は1人1題(共著は除く)、会員に限ります。
- ② 研究発表は受付先着順に56題までとします。これは上記①に伴う措置で、研究発表申し込みが80題や100題になれば、とにかく何らかの対策が必要です。ただし、今年度について考えれば、研究発表申し込みが40題を越す可能性はほとんどありません。また、時間表の調整によって、もう8題ぐらいは何とかなりますので、受付期間中に要旨が到着した研究発表は、よほどのことがない限り全部受け付けられると思います。しかし、講演要旨受付締め切りから大会まで3週間ですから、締め切り以後のお申し込みはお断わりすることになるでしょう。
- ③ 参加申し込みおよび懇親会申し込みは振替送金によって受け付けます。従来は、これらも申し込み書があり、同時に振替送金をしていただくことになっていましたが、今年度は振替用紙の裏面に大会・懇親会の参加申し込みを書いていただきます。なお、8月20日までに振り込めば参加費2,000円、懇親会費3,000円ですが、以後は当日受けとなり、参加費2,500円、懇親会は取り消し分しか受け付けません。

- ④ 今年度はポスター・VTR発表、エキスカージョンは行ないません。ポスター発表をぜひ行ないたい方は、12月に東京都区内でポスター大会兼忘年会を開催しますので、そちらを利用して下さい。なお、休憩室などに写真などを展示することは差し支えありませんが、スペースの制限がありますから、事前に事務局(03-364-2311、森岡)とご相談下さい。また、会員が個人的にまとまって大会後のエキスカージョンを行なうのも自由で、このため大会会場の受付付近に伝言板を用意します。大会に関する日程その他は次のとおりです。講演要旨受付締め切りまでに約半年ありますから、今からご準備願えると幸いです。講演要旨の用紙、振替口座番号などは次号のニュース(6月頃)に入れます。

- ① 場所：船橋市 東邦大学理学部
- ② 日時：1989年9月9日(土)～10日(日)
- ③ 講演要旨受付締め切り：8月20日必着
- ④ 大会および懇親会参加申し込み：振替送金で8月20日消印まで有効、参加費2,000円、懇親会3,000円、8月20日以後は当日参加で、参加費は2,500円、懇親会の当日参加は原則として受け付けません。
- ⑤ シンポジウム：未定(次号ニュースを参照のこと)。
- ⑥ 世話人：大会準備委員長(森岡弘之)、受付会場委員(徳武弘子)、講演会場委員、シンポジウム委員、会計委員、救護委員(以上未定)、懇親会委員(長谷川博)
(森岡弘之)

——— お願い・会費は過不足なく！ ———
学会の年会費の過不足で、会計幹事が苦勞しています。不足の場合は督促状を出さねばならないし、また数年先の分まで納入されると、それもまた会計上では余分な仕事となります。学会からの郵便物の宛名ラベルに住所・氏名以外なにも記されていないのが理想。
会費は、翌年分を年末に郵便振替で！

今年度大会委員（ボランティア）公募

以下の大会委員（ボランティア）を各1名公募します。委員は会期中（9月9-10日）会場にいていただきます。また大会前に、幹事会と合同の打ち合わせ会が1-2回あります。委員は会員本人に限ります。申し込みは事務所の森岡まで。締め切り3月15日。

① 講演会場委員（会場の点検整備、プロジェクターその他の講演用器機の貸出し・返却、会場用のアルバイトの管理。なお講演の進行はアルバイトがやります。）会場まで約1時間半以内のところに居住の40才以下の男・女会員、学生可。

② 会計委員（振替口座の開設、参加者・懇親会員の名簿作成、必要経費の支払い、決算表の作成）。東京近郊の会員。学生不可。できれば女性。

③ 救護委員（救護プランの作成、事故対応責任者。事故がなければよい）。会場まで約1時間半以内のところに居住の50才以下の男・女会員。学生不可。

以上はボランティアで、謝礼などは支払いませんが、誰にでも簡単にできる仕事なので（仕事量も大会時以外にもう1-2日働く程度）、希望者はご遠慮なく申し出て下さい。

（森岡弘之）

◆ 評議員・監事選挙結果について ◆

昨年12月に実施した1989-90年度の学会評議員および監事選挙の結果、次の方が当選しました。

【評議員】 投票総数163票 有効票163票

阿部 学・柿沢亮三・唐沢孝一・川内 博・黒田長久・竹下信雄・中村 司・中村登流・中村浩志・長谷川博・樋口広芳・福田道雄・藤巻裕蔵・森岡弘之・山岸 哲 以上15名

【監事】 投票総数161票 有効票152票 白票8票 無効1票

森岡照明・吉井 正（千羽晋示氏辞退により繰り上げ当選） 以上2名

◀ 会計幹事から — 会費ただいま処理中です ▶

年末・年始にかけてどっと送られてきた年会費。現在処理中で、この封筒のラベル上では未納になっている場合があります。ご了承ください。

本学会の名誉会頭である 山階芳麿氏は、本年1月28日ご逝去されました。慎んで哀悼の意を表します。

— 編集後記 —

「国際鳥学セミナー」の成功のもようを何とかお伝えできたかと思います。ご執筆・写真提供ありがとうございました。しかしお約束していた「'88我孫子大会」は積み残しになってしまいました。そのようすは次号で必ず。春風によって、長らく「浪人生活」を強いられていた若手研究者に朗報が届いています。そんなホットニュースも予定しています。（川内）

鳥学ニュース No. 30

1989年2月25日 発行 (会員配布)

発行所 日本鳥学会 (〒160) 東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館分館内 (振替) 東京1-6599
(電話) 03(364)2311

発行人 黒田長久 編集者 川内博・長谷川博 印刷所 文英社印刷